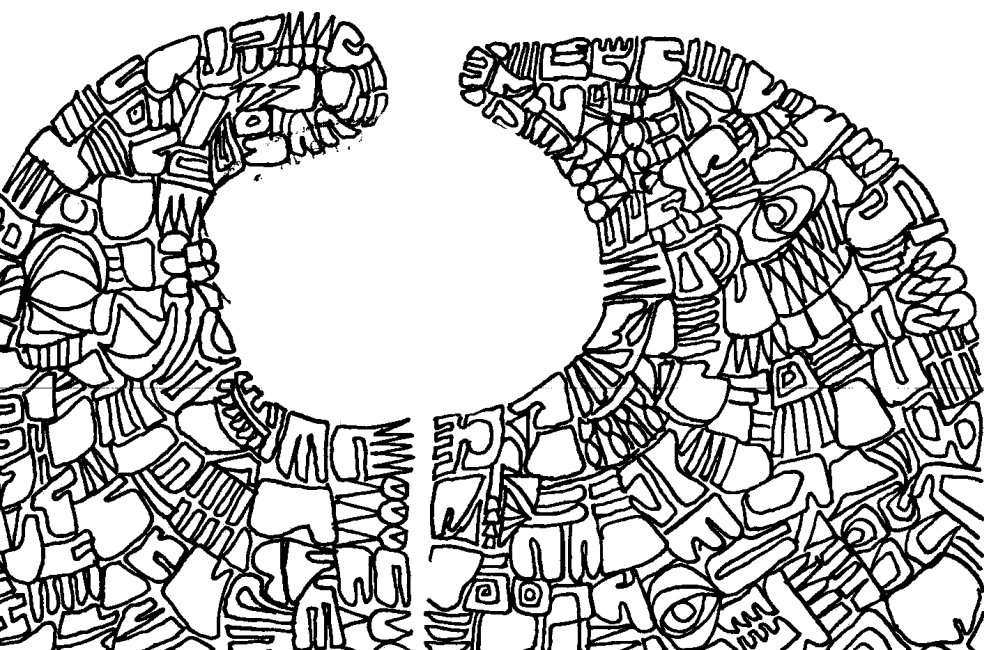


本田元弥

家のなか・なかの家

河出書房新社



本田元弥

本名酒井真弥

昭和九年名古屋市中に生れる

京都大学仏文科卒業

現在会社員

「家のなか・なかの家」により
昭和46年度文芸賞を受賞する

家のなか・なかの家

昭和四十八年七月五月初版印刷
昭和四十八年七月十月初版発行

定価 七五〇円

著者 本田元弥

発行者 中島隆之

発行所 河出書房新社

東京都千代田区神田小川町三ノ六
振替東京一〇八〇二番

印刷所 中央精版

製本所 小泉製本

©1973

*落丁・乱丁本はお取替えいたします

0093-037317-0961

目次

家のなか・なかの家
小人のランニング

131 5

装帧
大村
連

家のなか・なかの家

家のなか・なかの家

部長宅へ組合員が個人的に遊びに行くことは、別に悪いわけでない。誰かがそうしたとしても、ぼくは何とも思わない。ただ行ってみても、ぼくとしては、これといった話がないだけである。多分、部長の方でも、儀礼的に一筆「増山君、たまには拙宅に現われなさい」と書き添えただけのものかもしれない。

しかし八木田課長さんの話から推察してみると、金沢部長という人は、決して無駄に言葉を吐かないようでもある。年賀状にさりげなく記された一句が、それなりの意味をもっている。だから、ちょっと怖い気がする。

金沢部長に関する限り、社員との間に、会社をぬぎにした私的な関係はあり得ない、ということは、それはそれでよいとぼくは思っている。それにまた、うちの会社のなかであつても、純粹に私的な人間関係などというものは無いだろう。だが一方、合理的だといわれる金

沢部長にしても、私的な関係についてはこれを徹頭徹尾排除しているわけではないし、嫌っているが止むを得ず、ということでもない。年賀状については、これは毎年ぼくの所にくるし、ぼくも出している。さして神経を尖らすことでない。金沢部長は、ほとんどの社員に出しているようだし、なかには日常あまり接触のない社員もいるのだから、そのことが決して無駄でないとは金沢部長流の考え方として、いかにもありそうなこともある。昨年の中には「本年もよろしく」とあっただけだった。

ところで今年の中には「増山君、たまには拙宅に現われなさい」と、いささか好意的というかニュアンスが違っていて、これをどう解釈したらいいのか、ぼくは元旦早々、むしろ困惑してしまったのである。……つまり、そうすると「拙宅に現われ」なかったとき、金沢部長に対して、ぼくはなにかをしたことになる、ということを考えさせられてしまうのである。なにを？ それは、まだ、ぼくには想像つかない。しかし行かずに済ますと、拒んだことになる。拒んだことだけが「末ながく」冷ややかな客観的事実になりかねない。ここには、無言のまま最も安易な仕方で意志表示させられてしまうという落とし穴……の予感がある。その結果が、ぼくの来年度ひいてはその先の将来までも定められてしまうとの懸念が拭いきれずつきまとうのだ。それはぼくとしては甚だ不本意なことだが「では何故来なかったんだね？」と部長は冷笑するだろう。そうしてそのとき、昇進しなかった事情を思い知らされると同時に、それはまた自分で望もうとしなかったためだと否応なく納得させられてしまうだ

ろう。

実際、あるいは昇進の話かもしれない。過去に昇進した者は、たいてい一月中に内定している場合が多かった。(それが、いつ、どこで決まったかについては、不思議なくらい誰も口外するものがないのだが。)しかし、昇進の話でないかもしれない。要するに、それはわからない、ということが、自分をこんなにもためらわせているのだろうか。

尤もぼく自身、来たる四月恒例の昇進があつて、経営側からその申し出があつたとしても、それをただちに受けるかどうか、そこまで考えていない。だが、金沢部長の家へ行かなければ、その機会が立ち消えになることも、かなり確実だとみてよいだろう。というのは、金沢部長に限らず、うちの会社の経営側は、このなんでもない機会をとらえて、社員の会社に対する「積極さ」を試験することがしばしばあるからだ。そのような形での忠誠の確約をとることは、筆記試験や面接など公的性格の手順をふむ場合より、都合のいい面が多いらしい。職務評価はやっているようだが、これは経営側にとってもひどく煩瑣なものらしい。お粗末で胡散くさい勤務評定を、むしろこちらも望まない。話がしやすいということであれば、昼にあぐらをかいて、酒でもあれば、それは部長室に呼ばれ畏まつたときよりまだと思う者が当然多いだろうし、ぼくもどちらかといえばそうなのだ。

だから、ぼくは、くり返すようだが、部長宅を訪問することについて、後ろめたくもなんとも思っていない。これは行くべきでない、とは先ほどから言っていない。ただ……何故だ

ろう？ 結局しかし、ぼくは行かないだろう、と今そんな気がするのだ。

私はなにかを待っているのだろうか？ 待つ時間、私はただタバコをふかしているだけだ。郷里の母も待っていたかもしれない。タバコを吸いすぎて死んでしまった。

私の胃は、J型にぶらさがっている。レントゲン撮影写真でみると、それがわかる。痛いときだけ緊まり、じょじょに意識するようになった。一部が痛いのではない。J型に痛みわたりもしない。私は自分の胃を目で観察しないし、耳を澄ませて気配をうかがうのでもないが、近年よく知るようになってきた。注意してみると、自ら緊まるのではないのである。なものかに対して初めて緊まるらしい。あるいは、なものかによる緊縛、といった方が正確かもしれない。

私は、うちの会社の誰にも興味もてない。(だが、そのためにこそ、日々全身的に緊張していなければならないのだ) その誰にも会社のそとでなら、あるいはそうでないかもしれない。しかしまた、そとでなら、ほかにも人は掃いて捨てるほどいるだろう。しかも私にはそとでの時間がない。そとの誰かがこの会社に入ってきたら、もう私とは縁がない。——こういう私と、うちの会社の人々とは(彼等の本心がそうであるかは別として) 正反対なのである。それは彼等の日々の振舞いが、そのことを示す。私と同じような人は、すでにそと

へ出ていってしまった。

私も決心して、そとへ行くべきかもしれない。しかし、そとへ出た人々のほとんどが現在、良い目にあっていないのは何故だろうか？ 正直、私はそこの世界のことをあまり詳しく知らないのだ。

「窒息しそうだ！」と幾人かは叫んだ。どういう環境・状態のときか、私は考えた。空気がよどんでいれば、そうなるにちがいない。が、呼吸を困難にさせるのは、そのことだけではない。その仕方にもよるわけだ。といって、その仕方は自分がするのだから、では自分が悪いのかどうかとなると、それはそうとばかりも決められない。誰彼に命じられてそうする場合だってあるのだ。その仕方にあれやこれやの制限をつけ加えられれば、呼吸はしづらくなるだろう。ましてや毎日のことであってみれば。

雨滴が石をうがつように毎日くり返しやってくる等質の時間というものの恐ろしさ……。私自身空気に染まらないでおくためにも、私だけの時間が必要なだった。私は一頃、けちけちと時間を盗むことをしていた。しかし一度でも途切れれば、もとのもくあみになる場合の、なんとという徒勞であることか！ 私だけの時間とは、コマ切れの時間を寄せ集めることで成るものではない。

至上命令ですることが決められている、それ以外のことはしてはならない——これほどに苦痛なことがあるのか？ だから初めのうちは、時間を盗むことそれ自体が喜びであり、目

的に見えてしまっていたのだった。

同じことのくり返しを強いられ、いつまでとなくつづけさせられるとき、その人間の一生は、なんとも貧しいものになるだろう。なにもしないでは、奴隷と等しく、あるいはそれ以下の悪い生なのであり、同じことが再びくり返され始めたときから、その人間はなにもしないでいるのと変わりがない。そのようにして十年が過ぎた。

だから、いかに鈍な私でも焦ってきた。だから私は待つ気持になってきた。だが、なにを待っているのだろうか？ もしかすると、それは大地震のごとき天変地異かもしれない。ふと、なま味を帯びた「平等」ということばが頭に浮かんだ。

日の当たらない四畳半一部屋のなかで、日曜日正午近く、なにもしないでこうして石油ストーブに手をかざしながら坐っているわたし……。もう、どうしていいのやら、どうしようもないわたし。電気冷蔵庫が置き場所もなくして部屋の中央まで出張ってきている。壁にはしみが地図のようにひろがり、壁の剝がれた粉粒が擦りきれの焦茶けた畳に毎日少しずつ落ちている。洗濯をしに階下においていかなくではならぬのだけど、うす暗く急傾斜の狭い梯子段がおっくうだ。六年前、一時しのぎのつもりでこの部屋を借りた。ときどき便所の臭いが漂ってくる。どこでもいい、逃げ出したいと何度願ったことだろうか。でも、どうにもなっ

ていないわたし……。近ごろでは、わたしのあのときの決心をうらめしく思うことすらある。今でも郷里にだけは帰りたくないと思う殊勝な心がけだが、それとて戻りたくても戻れないからかもしれない。わたしは両親や田舎の人たちに、こんな見すばらしい姿を見せたくないから。

人間関係がはじめについて田舎の生活はわたしには偏狭で息苦しくてやり切れない思いだったの。毎日が同じ家事のくり返し、そうして結婚すれば母と同じようにまた子供を産んで育ててそれでおしまい。わたしはそんなことが厭だといっているのではない、でもそれだけで終りたくはなかった。わたしはもっと何かしたかった。そんなふうに言うのは若いうちだけよ、と忠告してくれた人もいるけど、わたしは信じなかったし、それは今も信じていない。ただ、やりたくてもまわりがさせなかったのだし、それは東京へ来ても同じだったということを知っただけ。

ある人が満足することが、ほかの人には満足できないというとき、そこには溝ができるけど、どちらが正しいか、そりゃ双方の言い分があるでしょう。ですから、わたしは殊更、わたしの方が正しいのだと言い張るつもりはありませんが、そのかわり相手の人に従うというわけにもいきません。そんな場合、そっとしておいてもらいましょう。ところが、田舎では強いるのです。人間というものは、何かしら満足なしでは生きていけないようです。けれど、何に満足するかという点は、これは人間としてはとても大事なことに思えるのです。

そうして人間は、あることに満足してしまうと、つぎへ移ると思いますが、それはやはりその人間がさらに一層人間になるということじゃないかしら。それが抑えられると、その人間はまず最初、退屈しますわね。やり切れないほど退屈して、それでもやせ我慢して耐えたときに、今度は病気になるんじゃないかしら。わたしはずっと親の言いなりになってきて地方の女子短大を卒業しました。それから花嫁修業をしているうちに病気になるしました。肺結核です。

わたしには大きな失望でした。なぜといって、一日も早く東京へ飛び立とうと焦っていた矢先でしたから。(肺病というのは精神的な原因が大きいのですね、わたしは東京の汚れた空気のなかで生活しているうち、薬も飲まずに治ってしまいましたから。) 上京する年の一月末ころ寒い日がつづいて、風邪をひきこみ、三日間高熱に浮かされ寝ていました。わたしは自分の将来のことをずいぶん考えました。自分でものごとを判断するのが、とてもおっくうでした。(わたしはそれまで両親にどれほど多く依存していたか、このとき初めて痛感させられたことを今も憶えています。) わたしはどうすればいいんだろう? 力になってくれる人を切実に求めました。幾たびも両親の顔がまざまざと臉の裏に浮かんでくるのです。けれど、わたしが進みたい方向での頼りになる人ではありません。出発点で、両親は反対しているのですから。それでも何とかしてくれる人がいるとすれば、それは両親しかいないのです。女の弱さということをつくづく感じさせられました。その年齢ではまだ知らないことも